

JA全農ウィークリー

J A Z E N - N O H W E E K L Y

Web版
JA全農ウィークリーは
こちらから



<https://www.zennoh-weekly.jp/>



4面

環境調和型農業
普及研究会を
初開催

(耕種総合対策部)

6-7面

スマート農業(熊本県)
小谷あゆみさんが
事例報告

(広報・調査部)

配送先変更(住所・宛名)、
配布部数変更はこちら



News!

水中ホッケー日本代表へ県産米贈呈

副キャプテンの県本部職員・柏木さんを激励

埼玉県本部



贈呈式に出席した(左から)戸田雅博副本部長、水村県本部長、柏木さん、薄井博文副本部長

埼玉県本部は7月26日、第8回アジア水中ホッケーカップに出場する水中ホッケー日本代表に県ブランド米「彩のかがやき」60キを贈り、激励しました。

さいたま市浦和区の農林会館で行われた贈呈式では、水村洋一県本部長から、日本代表副キャプテンで、埼玉県本部生産資材部資材推進課の柏木孝介さんに、県産米目録を贈呈しました。

水村県本部長は「全農代表として活躍を期待している」と激励しました。

「県産米を食べて力をつけ、優勝を目指して頑張ってください」と激励しました。激励を受けた柏木さんは「水中ホッケーという競技はまだマイナーなので、良い結果を残して知名度を上げていきたい」と大会での活躍を誓いました。

8月8日(11日)にシンガポールで行われた同カップにはアジア8カ国が参加。日本代表は9年ぶりに出場し、3位入賞でメダルを獲得しました。県本部では、今後もスポーツ応援に積極的に取り組んでいきます。

News!

世界少年野球大会福岡大会に協賛

各国から集まった球児たちにスイカを提供

広報・調査部



開会式であいさつをする王理事長

同大会には世界14カ国・地域から99人の野球少年・少女が参加しました。開会式ではWCBF理事長の王貞治氏が「たくさん友達を作りましょう。そして、1週間が無く、元気に盛り上がりましょう」と参加者を激励しました。

野球教室では、コーチから野球の基礎を学び、国際交流試合では福岡県内の6チームと招待した台湾の



各国から集まった球児たちにスイカを提供

チーム15人が熱戦を繰り広げました。食事の際には、福岡県産の「きたぎき西瓜すいか」(JA福岡市)や「若松潮風あま」(JA北九)を提供し、厳しい暑さと慣れない土地で頑張る子どもたちを「トッポンの食」で応援しました。

全農はこれからも、子どもたちの健やかな成長と夢を応援します。

全農は7月28日(8月5日)に開催された「第30回世界少年野球大会 福岡大会(主催：(一財)世界少年野球推進財団(WCBF))」に協賛し、来日した世界各国の野球少年・少女にスイカを提供しました。

千葉・富山県本部からブルーシート提供

大雨被害の山形県に全農グループが迅速な対応

山形県本部

山形県本部は、7月25日に庄内・最上地方を襲った大雨の被害を受け、7月31日に千葉県本部と富山県本部からブルーシート約300枚を譲り受けました。同日、特に被害の大きかったJA庄内みどりに200枚を提供しました。

山形県本部の長谷川直秀県本部長は「災害支援に役立ててほしい。一日でも早い復旧に向け、全農グループ一丸となって支援する」と伝え、ブルーシートを同JAの田村久義組合長に手渡しました。



ブルーシートは床上・床下浸水被害に遭った組合員の家屋の片付け作業などに活用。長谷川県本部長は「同JAから支援要請を受け、翌日には両県本部から届けてもらった。迅速な対応は、全農が全国組織だからこそその強み。両県本部には、心から感謝している」と話しました。

JA庄内みどりの田村組合長(左)にブルーシートを手渡す長谷川県本部長

来場者に「伊勢茶」ふるまい飲み比べ

「国際協同組合デー」記念ワンコインコンサート

三重県本部

三重県本部は7月25日、津市の三重県文化会館で開かれた「国際協同組合デー」記念ワンコインコンサートで、来場者に「伊勢茶」を提供しました。

ランチタイム前に1時間500円で楽しめる人気のコンサートに、開場前から多くの来場者が列をつくり、約1000人が優雅な音色に聴き入りました。

同イベントにはJAグループ三重など県内の協同組合で構成する三重県協同組合連絡協議会が協賛し、会館内で各団体の事業活動を紹介するパネル展示などを行いました。



三重県本部は、水出しの「かぶせ茶」と「深蒸し煎茶」を用意し、来場者にお茶の飲み比べを提供。暑い屋外から会館に訪れた来場者に好評で、「伊勢茶」の消費拡大へのPRができました。

「伊勢茶」の飲み比べに多くの来場者が足を止めた

ドローンで遮光剤吹き付け試験

ハウス栽培の夏季高温対策、省力化目指す

青森県本部

青森県本部は、農業用ハウスにドローンで遮光剤を吹き付ける試験に取り組んでいます。生育期間中のハウス内の温度やトマトの品質などに影響のある高温障害の軽減を調査し、費用対効果を検証します。

ハウスへの遮光剤の吹き付けは、ハウス内の温度上昇抑制に効果的ですが、夏の屋外作業は生産者にとって重労働です。この作業をドローンで行う試験は青森県JAグループで初めて実施しました。



試験は青森市・五所川原市・つがる市・七戸町の3市1町の計5カ所を実施。トマトハウスに遮光剤の「レディヒート」「ファインシールドスカイ」を吹き付け、9月中旬ごろまで生育状況などを観察していきます。

トマトのハウスに遮光剤を散布するドローン

環境調和型農業普及研究会を初開催

「グリーンメニュー」を解説

6JAから実践事例の紹介も

全農は、環境調和型農業の普及に向けた研究会を8月8日にオンラインで開催し、約250人が参加しました。研究会では、本会が取り組んでいる「グリーンメニュー」の技術について農研機構が解説するとともに、6JAが実践事例を紹介しました。



全国各地の参加者へ技術紹介・事例発表をオンラインで配信

全農は、2023年度に環境負荷低減技術や資材をまとめた「グリーンメニュー」を策定し、全国48のモデルJAで実証・実践を進めています。研究会は、モデルJAによる実践事例の発表に加え、農研機構からより詳しい技術解説を行うことで、生産現場の理解を深め、環境負荷低減技術の普及を促すことを目的に開催されました。また、生産と販売を結び付けるために、取り組みの出口となる実需者（量販店などの関係者）にも参加いただきました。

全農からグリーンメニューの概要と研究会開催の趣旨、今後の取り組みを説明した後、環境負荷低減技術として①化学肥料の削減②化

図1 環境調和型農業普及研究会の技術紹介と事例発表

| タイトル | | 発表者 | |
|------------------|------------------------|------------|----------|
| 1. グリーンメニューの取り組み | | 全農 耕種総合対策部 | |
| 2. 技術紹介・事例発表 | | 技術紹介 | 事例発表 |
| (1) 堆肥の活用 | 事例：堆肥入り混合肥料による施肥と土づくり | 農研機構 | JAさいたま |
| (2) 緑肥の活用 | 事例：ブロックリーにおける緑肥作物の活用 | 農研機構 | JA徳島県 |
| (3) IPM | 事例：バンカーシートによる害虫防除 | 農研機構 | JAそお鹿児島 |
| (4) 土壌還元消毒 | 事例：ソイルファインを使用した土壌還元消毒 | 農研機構 | JAふくおか八女 |
| (5) GHG削減 | 事例：水稲栽培時における水田メタンの発生削減 | 農研機構 | JA新みやぎ |
| (6) プラスチック削減 | 事例：マイクロプラスチック軽減肥料の取り組み | JA全農 耕種資材部 | JA丹波ひかみ |
| 3. 農研機構の取り組み | | 農研機構 | |

学農業の削減③温室効果ガスの削減——の三つに対応する六つの技術を発表し、参加者と意見交換を



全農の戸井和久チーフオフィサー(右)による閉会あいさつ

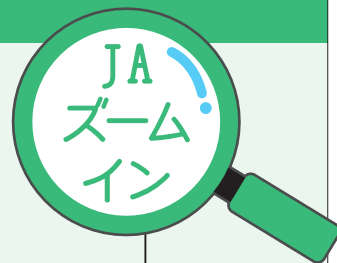
行いました(図1)。参加者からは「技術解説と事例をセットで聞くことができ、より理解が深まった」との声が聞かれました。

研究会は今後も継続して開催する予定です。次回は生産技術に加え、販売までを含めた事例の紹介などの実施を検討しています。

環境調和型農業の普及には、生産現場の課題解決に加えて、社会や消費者への理解浸透を図ることが重要です。今後もこのような取り組みを通じて、生産者と消費者の懸け橋となる取り組みを展開していきます。



「みえなかあぐり隊」のメンバー



職員で「みえなかあぐり隊」結成

管内農畜産物を県内外でPR

三重県のJAみえなかは、管内の多様な農畜産物を県内外にPRすることを目的に「みえなかあぐり隊」を結成しました。3つのJAが合併して誕生した2021年度から取り組みを始めており、メンバーは全員JA職員で、性別や年齢に制限はありません。任期は原則1

年で、毎年メンバーを募集しています。3代目となる今年度は7人のメンバーがイベントやYouTubeなどで活動しています。

「コロナ禍の逆境からYouTube活用へ」

「みえなかあぐり隊」は、元々同JA前身のJA三重中央が取り組んでいた「おもてなし隊」を引き継いだものです。合併後の新JAとして



YouTubeで情報発信



「みえなかあぐり隊」のポスター

も農畜産物PRに力を入れていきたいの思いから、新たな名称を設定して活動しています。

主な活動は対面で行う農産物イベントでのPRですが、結成当初はコロナ禍で多くの制限があり、活動できる場が少ない状況でした。そこで、YouTubeを活用し、毎月広報誌で紹介している管内農畜産物を使ったレシピ調理の様子や農産物直

JAみえなか (三重県)



売所の紹介動画などを制作しました。

「みえなかあぐり隊」の活動を多くの人に知ってもらうためにポスター制作や、さまざまな広報媒体で農畜産物をPRする誌面に登場しました。このような取り組みは、組合員や地域住民はもちろん、合併当初、組織全体を把握できていなかった職員にとっても管内農畜産物についての知識を深めるきっかけになりました。

イベントに積極的に参加メディアの取材も増える

経済活動が本格化してきた今年度は、多くの直売所イベントなどに参加し、「みえなかあぐり隊」の存在を知ったメディアからの取材依



メーテレ(名古屋テレビ放送)取材

頼も増えてきています。イベントでは専用の制服を着用して試食提供などを行うことで、一般の職員が配布するよりも目立ちやすいメリットもあります。管内農畜産物をPRすることで農家の所得向上に少しでも貢献できることを目指し、今後も精力的に活動を続けていきます。

| 概要 | 2024年3月31日現在 |
|---------|---|
| 正組合員数 | 1万5216人 |
| 准組合員数 | 1万6990人 |
| 職員数 | 636人 |
| 販売品取扱高 | 53億7千万円 |
| 購買品取扱高 | 47億2千万円 |
| 貯金残高 | 4463億円 |
| 長期共済保有高 | 8135億7千万円 |
| 主な農産物 | 米、麦、大豆、肉牛、キャベツ、ブロッコリー、梨、モロヘイヤ、イチジク、パナ、イチゴ |

「ザルビオフィールドマネージャー」 天草の早期米地帯で栽培管理に能力発揮

全農では、スマート農業の一つである栽培管理システム「ザルビオ®フィールドマネージャー」(以下ザルビオ)の普及推進に取り組んでいます。今回は先進的に取り組んでいる熊本県天草市の農事組合法人「宮地岳営農組合」について、農ジャーナリストの小谷あゆみさんに取材報告をしていただきます。

ザルビオを仲間に 笑顔を呼ぶかかしの里 天草の中山間地 「宮地岳営農組合」 を訪ねてみた

熊本県の西に浮かぶ天草諸島。100を超える島々の中でも一番大きい下島のほぼ中央に、天草市宮地岳町があります。山に囲まれた農村地帯で、温暖な気候を生かした早期米の産地として知られています。農事組合法人「宮地岳営農組合」が、最先端のスマート農業「ザルビオ」で効果を上げていると聞いて現地を訪ねてきました。

熊本県初の 営農組合から20年

宮地岳営農組合は、地域の高齢化と後継者不足が進む中、地元有志が集まって結成し、200



道の駅「宮地岳かかしの里」のかかし

6年に法人化しました。10地区

ある宮地岳一帯18軒をまとめて生産性を上げ、産地としての生き残りをかけたのです。

米を中心に、大豆、ソバ、ナタ

ネなどの生産・加工も行い、地元の道の駅「宮地岳かかしの里」などにも出荷しています。

組合メンバーも高齢化する中、

地域の未来に向けて伴走するJ A本渡五和の勧めもあり、スマート化に舵を切りました。

導入したのは、エクセルの情報

を地図に落とし込む全農の営農管理システム「ZIGIS」と、人工知能(AI)と衛星画像による栽培管理システム「ザルビオ」です。

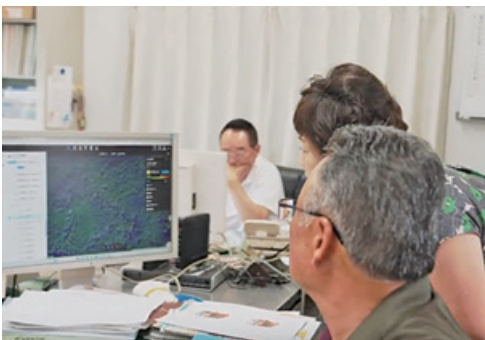
平均年齢60歳、 AIが圃場のリスクを 教えてくれる

事務所を訪ねると、3人の組

合メンバーがパソコンやスマートフォンを見ながら打ち合わせをしています。

代表の山崎三代喜さん(63)、作業主任の淵上真彰さん(63)、松崎正和さん(57)です。

皆さんが見ている画面が、ザルビオによる「生育マップ」です。ZIGISの圃場データ(ほやう)をザルビオに連携させ、圃場ごとの稲の様子が見える化。180筆の作業や



ザルビオの画面を確認



農業散布用のドローン



農ジャーナリスト・
フリーアナウンサー
小谷あゆみさん

石川テレビ放送のアナウンサーを経て現在はフリー。野菜を作るアナウンサー「ベジアナ」として家庭菜園歴は25年。都市でも農に親しむ市民、消費者が増えれば、農業・農村への理解が深まり、価値向上につながるかと考え、取材、執筆、メディアやSNSなどでも活動を行う。また、農ジャーナリストとして、都市農村交流や、生産と消費のフェアな関係をテーマに全国で取材、講演、シンポジウムでの司会やコーディネーターなどを行う。日本農業新聞ほかでコラム連載中。農林水産省・世界農業遺産等専門家会議委員なども務める。

生育段階が一目瞭然です。

画面をのぞくと、一つの圃場に赤い「病害アラート」が出ています。クリックすると、「穂いもち病」と「紋枯病」のリスクが高く、薬剤散布が必要だという警告サインです。

早速、薬剤を搭載したドローンを軽トラックに載せて、圃場へ。従来の農薬散布と比較して、アラートの出た圃場だけを防除すればよいので、数十分程度で完了します。

地力が分かれば 資材コストも削減

もうひとつの強い味方が「地力マップ」です。地力ムラというのはどうしても出てくるものですが、これを色の濃淡で表し、「可

変施肥」を提案してくれるのです。

田植え前の土づくりの段階で、圃場の中の地力のバラつきをAIが教えてくれるため、肥料のまき過ぎを防止し、資材コストの削減につながるだけでなく、環境にも優しく、地力の均一化が図れます。

「地力マップ」の活用で、反収(10^ア収)が10〜20%増加し、格付けも2等米から1等米になりました。

J Aと農家が協力、 地域全体で 効率アップ

J A本渡五和の営農部T A Cの山下清弥さんにザルビオ導入を

提案した経緯を伺いました。

「宮地岳は、中山間地で小さな田んぼが点在していて、見回りにも時間がかかり、施肥や防除が追いつかずに品質がばらつき、収入も不安定でした。今後、気候変動の激化でさらに病害の発生が深刻になり、高齢化によるさらなる農地集積も予想される中、効率化と品質向上を図るためには、スマート化が必要だと考えました」

そこで、スマホでも操作がしやすく、導入コストの負担が少ないザルビオの導入を持ちかけたそうです。状況を良く知る山下さんのアドバイスとあつて組合の皆さんも

同意し、21年から実証を開始、22年から本格導入しました。

ザルビオの 予測機能にびっくり

早期米の田植えは4月初旬。従来はJ Aの防除暦に従い、6月後半から7月前半の出穂期に防除を行っていました。

ですが、導入したその年、例年よりも2週間ほど早く、ザルビオがいもち病発生のアラートを示したのです。「本当かな」と思いながらもザルビオの指示通りに防除を完了させたその翌日に、県からいもち病の注意報が発令。無事に防除を終えていた宮地岳は、

被害を免れました。

こうした評判が広がり、現在ではJ A管内7法人全てでザルビオを導入、県も導入を行っています。

さらに、地元の若い農家夫婦が、ドローン防除事業の事務所を開設し、協力体制もできました。

組合の皆さんに何うと、「ザルビオはこれからの農家の良きパートナー。40年以上お米を作っている、今の温暖化には太刀打ちできない。これからの農業はAIも使わんといかんばい」

天草に浮かぶ島の中でも山間部にある宮地岳。昔から横のつながりが強く、地域みんなで協力して土地と暮らしを営んできました。これからは、フィールドマネージャーの名の通り、頼もしい仲間「ザルビオ」を迎え、農家とJ A、道の駅や他産業、若い力も加わって、地域の農業から活気を取り戻そうとしています。



スマホ画面上のザルビオの「地力マップ」



J A本渡五和の山下さん



ザルビオの試験区



(左から)宮地岳営農組合の松崎さん、小谷さん、同組合の山崎代表、洲上主任

今回の取材の様子をまとめた動画はこちら



久米仙酒造×ニッポンエール サワーの素2品

「青森県産ふじ&世界一」
「広島県産はっさく&レモン」



全農は久米仙酒造(株)と連携し、「久米仙酒造×ニッポンエール 青森県産ふじ&世界一 Wりんごサワーの素」と「久米仙酒造×ニッポンエール 広島県産はっさく&レモンサワーの素」2品を共同開発しました。9月10日から全国の量販店などで販売します。 【営業開発部】

「青森県産ふじ&世界一 Wりんごサワーの素」は、JAアオレンが供給する青森県産「ふじりんご」の果汁を6%と「世界一りんご」の果汁を2%使用し、すっきりとした味わいと、さわやかな後味に仕上げました。

「広島県産はっさく&レモンサワーの素」は、JA広島果実連が供給した広島県産のはっさく果汁を5%とレモン果汁を0.5%使用し、キレのある味わいと、新鮮な風味に仕上げました。



久米仙酒造×ニッポンエール

「青森県産ふじ&世界一 Wりんごサワーの素」 「広島県産はっさく&レモンサワーの素」

「純情産地いわて」
新CMを公開

「まえむきに ひたむきに 純情産地いわて」
を表現

岩手県本部は、「純情産地いわて」ロゴマークを使用した「まえむきに ひたむきに 純情産地いわて」の新CMを公開しました。 【岩手県本部】

CMは、早朝のレタス畑で働く生産者のシーンから始まり、生産者のひたむきな思いが食卓に広がっていく様子を描いています。「純情産地いわて」のブランドプロミスとスローガンである「まえむきに ひたむきに 純情産地いわて」を表現した内容となっています。

新CMは岩手県本部公式YouTubeチャンネルで公開中です。

JA全農いわて公式YouTubeチャンネルはこちら▶



「まえむきに ひたむきに 純情産地いわて」を表現した新CM

JA全農の産地直送通販サイト
JAタウン ショップ紹介

JAいわて花巻

JAいわて花巻では、初春から晩秋にかけて管内で生産される青色系統の花きを「花巻ブルー」と名付け、産地のアピール活動を行っています。

花巻市出身の宮沢賢治の作品内で印象的に用いられる「青色」になぞらえ、「賢治の情熱を受け継ぎ未来に繋げたい」という思いが込められています。

写真の「花巻銀河ブルー」は2015年にデビューした、JAいわて花巻オリジナル品種の鉢植えリンドウです。耐暑性に優れ、光沢のある濃い青色の花が特徴。開花した花卉の深い青色と、雄しべ、雌しべの乳白色の群生は、まるで秋の星空を彷彿とさせます。



いわて花巻の鉢花
「花巻ブルーシリーズ・
花巻銀河ブルー」
・・・3500円(税込み)
※9月下旬~10月の
発送予定です。

ご注文はこちらから



▶ JAタウンはこちらから <https://www.ja-town.com>
▶ お問い合わせは shop@ja-town1.com

